

ボロジノ諸島発見史をたどる放浪の記

木村 崇（京都大学名誉教授）

那覇からボロジノ村へ、そして南大東島へ

昨年はすっかり「ボロジノ」にふりまわされた1年だった。そもそもは1月末、那覇で南大東村観光大使の吉澤さんを紹介されたことに始まる。スラ研・島嶼学会・琉球大学共催の「境界研究」に関連した研究集会が終わって、関係者が打ち上げのため郷土料理屋に集っているところだった。わたしは自費参加の部外者だったが、正メンバーである妻、黒岩の同行者として末席を与えられていた。吉澤さんの話に耳を疑った。大東2島はロシア人船長が発見したもので、英国海軍の海図にも「ボロジノ諸島」と記載されている、このことは島の人ならだれでも知っているというのである。ロシア屋としてはいささか抵抗を感じた。イギリスの公的資料に載っているからとってあっさり信用してよいだろうか。開村百年記念に刊行された『南大東村誌（改訂）』の該当箇所の記述を手がかりに、インターネットやロシア史の専門家から得た情報をあつめた。英国海軍作成の水路図に通じていそうな人などにも問い合わせ調べていくと、次第に問題の輪郭が見えてきた。

そんな矢先、別の用件で2月に黒岩と二人でペテルブルグとモスクワを訪れる機会ができた。できればついでにボロジノ村をこの目で見ておきたいと思った。村長さんのメールアドレスがわかったので日本から接見許可を求め続けていたのだが、モスクワについても返事はなかった。さいわい帰国前日までにすべての用務は片付いていた。ここはタタール人じゃないが「招かれざる客」で行くしかない。ベロルスカヤ駅から黒岩とスモレンスク行きの列車に乗った。ボロジノ駅下車。たった一人の駅員は犬の散歩でいないという。博物館（小さな駅舎の半分を占める）のおばさんに道を教えてもらった。村役場までは5キロの道のりで、タクシーやバスはないそうだ。雪道から左右に広がる古戦場を眺めて、めずらしく感傷を覚えた。村役場は『戦争と平和』に描かれている教会の方角ですぐに分かった。接見日は変更になっていて女村長は不在だった。そうならホームページを更新してくれなくちゃ。メールも届いていないという。そんなはず、ありえないのだが... こちらの表情になにかを察知したのか、副村長が時間を割いて話を聞いてくれた。彼女のメルアドももらった。9月はじめのボロジノ祭の時に、南大東村の観光大使が表敬訪問に来ると伝え、再会を約束して村役場を後にした。ショーロホフの『静かなるドン』に出てくるコサック村の百姓屋みたいな建物だった。帰り道は吹雪だった。だが、気持ちはすこし晴れていた。

3月には、もう一つの「ボロジノ」を訪れることになった。島の観光事業のひとつで、那覇から南大東への往復航空運賃と宿泊費が格安の（国からの助成があったらしい）旅行に参加した。吉澤さんの手配である。村役場の産業課課長で民謡歌手兼作詞・作曲家でもある浜里さん（愛称ハマちゃん）に、ビデオカメラで撮った冬のボロジノ村のDVDを贈呈した。島の発見についていろいろ調べていると話したところ、なにか腑に落ちない表情をされたの

が気になった。島に無数にある鍾乳洞のひとつの「地下湖探検」を案内してくれた、まるごと自然博物館の東さんに、わたしらは村誌に書かれていることで十分だと思いますが、といわれてはじめて謎が解けた。もしかしたら、まったく余計なことをしているのかもしれない、その時ふとそう思った。東さんには後日、一通りの調査結果をまとめた後述の冊子「もとの名は『ボロジノ』？」を送ってあげたところ、感動したというメールがとどいた。もしかしたら、自分のやろうとしていることはあながち無駄ではないかもしれないと、ちょっと安堵をおぼえた。

ふたたびボロジノ村へ、そしてロシア帝国外交文書館へ

心当たりの方々に問い合わせたりネット情報をたどっていくうちに、ボロジノ諸島発見の経緯についての核心部分が見えてきた。決定的だったのはスラ研図書館の兎内さんから紹介された本である。「Российско-американская компания и изучение тихоокеанского севера 1815-1841» (НАУКА, 2005、以下「露米会社資料集」と略記)という、史料集の活字版であった。これにボロジノ号船長のザハル・ポナフィヂンが露米会社の理事会に提出した新島発見の報告が載っていた。それによれば、同船はマニラから出港して露米会社の本拠地のあったノヴォアルハンゲリスク（米国アラスカ州南西部、現シトカ市）めざして航行中、海図に載っていない島を二つ発見、緯度・経度、島の大きさ、二島間の距離、付近の水深を測定したが上陸は断念、船名を採って「ボロジノ諸島」と名付けたとある。1820年8月20日（露歴、以下同様）のことである。モスクワにある АВПРИ（ロシア帝国外交文書館）でこの番号の Лист（一件書類の通し番号を付された紙葉）がおさまっている Дело（一件書類をたばねたファイル）の、残りの Лист をすべて見れば、一連の事情はもっとはっきりするはずである。慶応の横手さんに聞いたところ、弟子のシュラートフさんがロシアの文書館事情に詳しいとのことだった。そこでかれに利用許可願（отношение）の書き方を教わり、スラ研の岩下所長から6月16日付けの公文書としてEMS便で郵送していただいた。9月はじめ、吉澤観光大使と島嶼学会の有志がボロジノを訪れる旅に同行し、一行が帰ったあとで、ひとり残って文書館で史料調査をすることにした。日程がきついで、いざというときのため、黒岩にも後からモスクワに来てもらってバトンタッチすることにしてあった。幸か不幸か、この読みはざりの中した。8月末まで АВПРИ は夏期休暇中である。利用許可願は休暇に入る前に届いているはずだが、許可の決定ははたして9月はじめに下りるだろうか。はなはだ心もとなかった。

9月3日、吉澤観光大使ら一行とボロジノ村役場を表敬訪問したこと、その週の日曜日にボロジノ時代祭りの野外劇を見たことについては、北海道新聞の文化欄に載せていただいたので（10月20日、21日夕刊）このエッセイでは繰り返さない。この頃モスクワに戻っていたシュラートフさんは許可の有無を連日確かめたくれていたが、休暇中は文書館の電話はおろか、ファックスもメールもつながらない。日本大使館の福島公使にも協力を仰いだが、やはりダメだった。いよいよ文書館に通う予定にしていた前々日くらいに、シュラートフさん

から朗報が届いた。

しかし文書館を訪れてみて、わたしの見通しは甘かったことを知った。お目当ての Дело を閲覧するのに、Фонд（関連文書類をまとめた最上位分類項目）、Опись（Фонд の下位分類項目で、一連の Дело を集めた目録）と順を踏んで請求手続きをしていますが、土・日はさまる関係で、私より4日後に帰る黒岩さえ間に合わないことがわかったのである。そこで、今回は刊行されている Лист の内容の確認が第1の目的なのだからと、予定日の繰り上げについて閲覧係の婦人と交渉をした。その結果1日早めて、黒岩の帰国当日に見せてもらうことになった。あとでこの文書館を利用した人たちに聞いたが、前任の閲覧係ならとうてい考えられないことだそうだ。11月に北大総合博物館で開かれた「海疆ユーラシア 南西日本の境界」展の大東諸島コーナーに置かれていた冊子「もとの名は『ボロジノ』？」には、脚注にこの文書館史料を使用した注釈がのっている。だから、ありていにいうとこれは黒岩の目を通してのものである。もちろん、このエッセイを書いている時点では、のちに述べるように、しっかり私の目も通してあるが。

ロシア国立海軍省文書館へ

北大博物館の展示コーナーに置いていただいた前述の冊子を読み返すと、『大東諸島』のもとの名付け親であったポナフィヂンは1830年に亡くなっていますから、自分の偉業を認められることなく、むなしく他界したことになります」、「はたしていつの時点でポナフィヂンの発見が正式に認知されたのかについては、今後の研究を待っていただかなくてはなりません」という文言で結ばれている。また前述の北海道新聞夕刊（10月21日）では、「残念ながら、ポナフィヂンが亡くなる前に『ボロジノ諸島』の存在は確認されていない。いつ公認がなされたかについては、ペテルブルグにある海軍省の文書館にもぐって徹底的にしらべる必要がある。長期戦になるだろう」と書いている。

9月のボロジノ村訪問と外交文書館利用については、スラ研のグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」の100%の資金的バックアップがあって実現した。同じ年度内にお問い合わせするのは気が引けたが、プロジェクトの代表や会計担当の方の計らいで、なんとか必要額の3分の2程度の助成をしていただいた。「特別共同研究員」という身分はこの年度内で打ち切りになるので、まことにありがたかった。お願いついでに今回もペテルブルグにある РГАВМФ（ロシア国立海軍省文書館）への利用許可願い（отношение）をスラ研から新所長の望月さん名で出していただいた。3ヶ月以上の余裕を見て発送したつもりだが今回も手発前まで、「許可する」という返事はついに届かなかった。

ところで、現在ロシアで出版されている地図では、南・北大東島の位置のところに、小さな世界地図だとロシア名だけで О-ва Бородино と書かれ、大きいものだとさらに日本名の о. Минамидайто（南大東島）、о. Китадайто（北大東島）が並記されている。南大東村誌が「英国海軍水路誌や欧米製諸地図には、すべて南・北大東島はボロジノ諸島（Borodino Island）<…>と記載されている」というのはもともとで、19世紀半ばにはまちがいがなく、ロシア帝

国海軍の作成した海図が先行的に流布していたからである。ロシア国立海軍省文書館にはおそらくその原版が存在するだろう。問題はそれが何年に発行（当時の印刷技術からして「発行」と表現するのは不適當かもしれない）されたかである。また、海図作成の決定はしかるべき機関が正式に認可しているはずなので、その文書も探さなくてはならない。

年が明けて1月19日に成田を発った。今回もシュラートフさんに許可の有無を問い合わせてもらった。かれは文書館館長とは昵懇の間柄だそうで、ペテルブルグ到着の翌日、「許可は下りている」とのメールが届いた。海軍文書館は月・水・金が普通の文字資料、火・木が海図、設計図などの絵図面資料と、閲覧日が別れている。21日は金曜日なので開館時間の10時に扉を押した。革命前の資料は地下鉄ピオネールスカヤ駅から徒歩20分ほどのところに建てられた高層の新館に保存されている。入館手続きをすませ2階の閲覧室に入ると、年配の閲覧係の女性が、「あなたの *отношение* には問題がなかったので返事を出しませんでした」(?!) とのことだった。言語学的な素養が多少はあるつもりなので、無言が yes のサインになることは理解できるが、現在住んでいる岩手県のほかに、特異な同一の「言語外記号」がこんな身近にあったとは意外だった。そのかわり届いていた *отношение* に書かれた内容はよく理解していて、関係しそうな *Опись* の冊子がすでに取りそろえられており、そのまま手渡してくれた。

ここの文書館は、許可さえもらえばコンピュータの使用が可能で、各種コピーも、手続きはすこし面倒だが、わりとリーズナブルな料金でもらえる。21日いっぱいかけて請求する *Дело* をすべて書き出した。閲覧開始日は26日で、この緩慢さはモスクワとあまりかわらない。ひまができたおかげで防寒靴を買ったり、長年つきあいのある科学アカデミー・ロシア文学研究所を訪問したりできた。



「ラスコーリニコフの下宿」もさもありなん

ロシア文学研究所の若手研究員で、昨年末に日本ロシア文学会のトルストイ・シンポに招いたアレクサンドロフさんが科学アカデミーの格安ホテル（1泊1000ルーブル）を手配して

いてくれたので、25日にはホテルの引越をした。朝食はなく、バス・トイレが共同なので不便だが、安さには替えられない。困ったのはインターネットが使えないことだ。聞くと1室だけWiFiが使える部屋があるという。無理をいって翌日からその部屋を使わせてもらうことにした。初日の部屋はまるでウナギの寝床で(ベッド、ソファ、洋服ダンスが縦一列に置いてある)、小さな洋服ダンスは、扉を閉じてもすぐ半開きになった。WiFiの使える部屋はソファ分だけ短かった。高さが50センチほどしかない二重窓は、右半分がフォールトチカ(換気用二重小窓)になっている。当初は外気温が高くて部屋でじっとしていても汗ばむので、それを開け閉めして温度調節をした。まさにこれはラスコーリニコフの下宿部屋だ。アレクサンドロフさんは、それよりはましですよといて慰めてくれた。しかし、トイレの使用済みペーパーは便器隣の屑籠に入れる決まりらしく、紙があふれるようになると、さすがに廊下まで臭いが漏れてくる。洗面所の奥がトイレなので、利用時間の選び方には神経をすり減らした。洗顔の時いつも女性にばかり会うなと思ったら、そこは女性専用だった。気づいたのは5日目の朝だった。

朝9時、エルミータージュの並びのミリオンナヤ(百万長者)通りという、悪い冗談としか思えない住所にある「下宿」から這い出して、モイカ運河のほとりの「馬小屋」の長い建物沿いに歩いていって「血の救世主教会」の横を右折、こんどはグリボエドフ運河沿いに歩いてネフスキー大通にでる。最寄りの地下鉄乗り場は「ネフスキー大通駅」だが、近い方の入口は10時まで閉じているので、ガスチンヌイ・ドゥヴォール(小売店が集まった一種の百貨店)側まで行かねばならない。徒歩の所用時間は25分。最初の一週間はおかゆ、もしくはシャーベット状態の道で、靴もズボンの裾もぐしゃぐしゃになった。次の週から天候は一転、典型的なマロース(極寒)が襲った。またすこし気温がゆるむと大量の雪が積もる。表通りは除雪してくれるからよいが、わたしの歩くルートは19世紀のペテルブルグさながらであった。頭上からは落雪、落氷の危険がせまり、足下はでこぼこの雪塊、でなければつるつるの氷、そこをまるで下駄をはいてスケートリンクを歩くような心もとなさである。すし詰め地下鉄に乗り、やれやれ15分で下車すると、そこから文書館までがまた徒歩20分。閲覧時間が10時から4時までだから、昼食をとる時間はない。おかげでおなかの周りがすこし楽になった。

いざ探索開始

19世紀半までの、クロンシュタットとカムチャトカ半島のペトロパブロフスクの間を最速で航行した記録は8ヶ月と8日という。北米西岸のノヴォアルハンゲリスクはさらに遠い。合計28回の及ぶといわれるロシア船の世界周航はどれも2、3年がかりである。1821年1月26日付けのポナフィヂンの報告が、露米会社重役会から海軍局まで届くには最低1年はかかったはずである。したがって海軍局会議において、ポナフィヂンと、その後ポヴァリーシンの発見した島(カムチャトカ州長官リコルド海軍大佐あての、1822年6月30日付新島発見報告)は緯度、経度の差がわずかであることからして同一ではないかと疑い、関係機関に確

認を命ずる決定がなされたのが 1822 年 12 月 1 日であるのも納得が行く。むしろ迅速な対応というべきであろう。

この会議の議事録の記述からすると、海図作成部の長であるサルィチェフ海軍中将の指導で作成された Восточный океан (「東の大洋」、すなわち太平洋) の地図には 2 島が隣接されて描かれていたようである。この地図が正式に発表 (опубликован) されるのは 1826 年で、それにはポナフィヂンの命名した о. Трёх холмов (直訳すると「三丘島」、現在の「鳥島」) しか載っていない。普通に考えればこの 3 年の間に確認がなされたものとみなすべきだろう。しかし私が調べた限りでは、それを裏付ける文書は見いだせなかった。

海軍参謀会議と海軍局 (Адмиралтейств-коллегия и Адмиралтейский департамент) はニコライ 1 世の勅令により、わずか 1 月ほどの移行期間で閉鎖廃止され、そのかわり 1827 年 10 月に海軍総司令部 (Главный морской штаб) が新設される。海図作成の部署も大幅な改組となり、局に昇格した海図局長 (гидрограф) にはサルィチェフ海軍中将が任命され、その補佐機関として海図工場 (Гидрографическое депо) と製図工房 (Чертёжная) も置かれた。海図作成の実務に当たったのはこの部所だろう。

海図局を司ることになったサルィチェフは、前述の海軍局会議決定の 6 年後、1828 年 6 月 19 日付けで奇妙な指令書を出す。指令の宛名は輸送船「クロトキイ」号の船長で海軍中佐のガゲメイステルという人である。指令は太平洋を航行する際にはできるだけ最短距離の航路をとるように、しかし同時に、時間を浪費せぬようにといいつつも、それまでに伝えられている水路情報をできるだけ点検するように指示している。その第一にあげているのがポナフィヂンの発見したボロジノ諸島なのである。かれの指令書は細かな具体的指示で満ちあふれている。新局長としての面目躍如というところか。

ところがこれがくわせものだった。わたしはすっかりこの文書に惑わされてしまった。1828 年 6 月以前に、ロシア海軍の海図局はまだボロジノ諸島を認知してはいないと思ってしまったのである。

上述の「露米会資料集」には残念ながら、ガゲメイステル報告の抜粋しか載っていない。カムチャトカを発って、太平洋を南下、ホーン岬を回って大西洋に出、リオデジャネイロにいたるまでに通ったルートで目撃したことや観測結果についての詳細な報告である。これは帰路の記録であって、往路に関してはそれらしい文書を探し出して現物に当たってみるしかない。それ自体はわりと簡単で、同じ Дело の中にあつた。クロンシュタット出港から途中の寄港地につくたびに、じつにまめに報告書を送っている。写字生の書いたものや、順風満帆の時のものは簡単に読める。しかし直筆のものとなると、内容も込み入っていて解読作業は難航した。しかしボロジノ諸島に関しては、ずばりの情報はどうやらなさそうだと見当が付いた時点で、戦術の転換を考えた。

発見その 1

文字情報ではなくモノ情報から攻めるのだ。1 月 27 日 (木) 午後から海図関係の閲覧日で

ある。わたしは1830年から1850年までの太平洋の北半球に関する地図類をすべて調べることにした。Делоの請求書類を持って行くと、閲覧係の例の年配女性が、「念のために20年代のものも出しておきましょう」といった。翌週の2月1日(火)、ホコリにまみれた巨大な判型の分厚い地図帳が一冊ずつ運ばれてくる。お目当ては二つの小さな島だから、関係のないものはすぐに退けられてゆく。次の大型地図帳に手を触れたとき、一瞬、ある種の「予感」のようなものを体全体で感じた。О-ва Бородинские (ボロジノ諸島) という文字が目飛び込んできた。あわててタイトルページに戻ってみる。「Атлас северной части Восточного океана」(『東大洋北部地図書』) というものだった。



海軍会議で問題になったあの地図の完成版だ。表紙をめくった最初のページに、1826年5月13日付にて海軍局製図部受理とあり、次をめくると、タイトルの下にサルイチェフ海軍中将・海図部長の指導のもと海軍印刷所にて製版および印刷と記されている。副題には「最新の測量成果と地図付き」と銘打ってある。本の目次に当たる部分に、その最新情報が典拠を示す形で細かく記述されている。日本、黄海、中国及び日本沿岸に隣接する東大洋(太平洋のこと)の一部に関する部分を見ると、ボロジノ諸島と三丘島(鳥島)は1828年ポナフィゲン海軍中佐が発見し、緯度・経度を測定したことが明記されている。また、クルゼンシュテルン海軍少将やゴロブニン海軍大佐の作成した地図からも採られていることが断つてある。学術的水準の高さを感じさせる地図書である。念のため定規を借りて、見

開きの寸法を計ってみたら、縦61.5cm、横89cmもあった。

ロシア海軍軍人たちがリトグラフによる海図印刷技法を開発するのは1823年で、リトグラフ印刷工房は海軍印刷所に吸収される。したがって、この地図は当時の最新技法によるものだった。その次に持ってこられたのは、判型は同じくらいだが、厚みの勝る、これも立派なものだった。表題は「Атлас Южного моря, сочиненный контр-адмиралом Крузенштерном」(『海軍少将クルゼンシュテルン著、南大洋地図書』)となっている。クルゼンシュテルンはパリ、ストックホルム、ゲッチンゲン、エジンバラなどの科学アカデミー会員でもあることが麗々しく書かれ、この第二部(第1部は1824年刊行)は勅命によって1826年に発行されたものであるとうたわれている。



ロシア語表記に続いて、ページを改めフランス語でもまったく同じことが書かれており、西洋諸国に向けて情報発信しようとしていたことがうかがえる。日本に関係しそうな部分を紹介すると、№21 朝鮮半島および朝鮮海峡、№22 日本諸島図、長崎港図、№23 蝦夷島図、№24 クリル諸島図、№25 サハリン半島図などが収められている。

これにも南・北大東島はボロジノ諸島と記載されているが、I-s Borodino と名詞形で表記されている。また三丘島は остров Трех Холмов でなく、I. Ponafidine となっている。クリル

列島の図は他の部分に比べて正確で、色丹も I. Spanberg (サルイチェフ版では ос. Чикотан) として明示しており、この頃すでにロシアはクリル諸島の一部として認識していたことあかしといえよう。日本全体はかなり歪んで描かれているが、とりわけ北海道のオホーツク海に面する部分がかかなりデフォルメされている。サルイチェフ版はその部分を点線で描いて、未測量であることを示しているのだから、彼の学問的良心を見て取ることができる。なお、クルゼンシュテルン版はどこで印刷したかは明記せず、サンクト・ペテルブルグを発行地とするのみである。その出来映えから見て海軍印刷所でリトグラフ印刷したことは明らかなのだが。ロシア海軍省の海図作成部局史を書いた4巻本の第3巻に主要な出来事の年表が載っている。それによれば出版年は同じながら、あきらかにサルイチェフの仕事が先行している。クルゼンシュテルンの地図を見て、サルイチェフ海軍中將の心中はいかばかりであったろうか。自分は出典としてクルゼンシュテルンの名を挙げているのに、相手はサルイチェフの業績については一言も言及しないばかりか、「勅命」の威をかりて島名までも、フランス語表記の便宜のために勝手に変えたのである。ただし、これはあくまでも筆者の推測であるが。くわしい比較分析は執筆予定の論文に譲ることにしたい。

ここで、私がサルイチェフに抱いた疑念について考えてみたい。これほどまでに立派な地図を作成しながら、どうしてボロジノ諸島や三丘島(ポナフィジン島、鳥島)の発見という、ポナフィジン船長の業績を疑うような行為にでたのであろう。最初わたしはサルイチェフの振る舞いに「猜疑心」の強さを感じた。だが、地図を眺めるうちに彼の学問的誠意を認めるようになり、これはようするに「石橋をたたいて渡ろうとした」のだと理解した。この時代の地図はまだ不完全である。念には念をおさなくては世界の航海者たちの命に関わるのである。この問題については「境界研究」に関連する論文の中で検証してみるつもりである。

ロシア科学アカデミー植物学研究所へ

予想外にはやく目当てのものが見つかったので、ペテルブルグ滞在ののこり3週間の過ごし方を考えなくてはならなくなった。ポナフィジンの新島発見も、もとはといえば露米会社の活動に関係している。航海者の足跡をおいつつ、この会社がいったい何をしようとしていたのか、あれほどまで規模を広げ、物的・人的犠牲を払いながら、数十年にして跡形もなく無くなったのはなぜか。その活動範囲が日本でいう千島列島や、わたしの故郷である北海道にまで及んでいたことはよく知られている。「無くなった」原因は、かれらの残した文章類を分析しなければわからない。手始めの日本との関連のありそうな史料を探して見た。

すると1855年、6ヶ月間の日本滞在のさい「ニポイス島とイツ半島で」(на островах Нипоис и полуострове Итцу)採集した植物を帝室植物園に寄贈したという中尉パールキン某のことを書いた文書に出会った。イツ半島とは伊豆半島だろうが、ニポイス島というのが分からない。時期からしてこれは間違いなく開国交渉使節のプチャーチンたちを運んできた船員である。そのなかにたまたま植物採集を趣味にする船員がいたという訳ではない。当時世界周航(半周航も含め)をする船員たちは、水路情報だけでなく気象情報、海賊やすれ違った船舶の種

類や航行目的の分析、飲料水、食料、燃料などの調達、交易の可能性などと並んで、可能な上陸して動物や植物の生態系をしっかりと記述することも彼らの任務だったのである。

『北大東村誌』には、「1859年ロシア海軍の練習船乗組員の士官が大東島に上陸し植物採集を行い、その採集品はペテルスブルグの国立植物園内の博物館に保管されている。この時の採集品にボロジノジシキソウがある（初島、1972年）」との記述がある。時間があればこれを確認したいと思っていたので、植物園に行つてついでに伊豆半島での植物採集のことも調べようと思った。ロシア文学研究所のアレクサンドロフさんが、バグノ所長（わたしが長年親交している人物）名でロシア科学アカデミー植物学研究所長宛てに *отношение* を作成してくれた。これを持参して2月10日(木)、植物園内にある研究所のアルヒーフを尋ねた。あいにく1人しかいない係員は病欠しているという。親切な年配女性の職員が彼女の自宅の電話を調べて掛け、じかにわたしと話をさせてくれた。14日(月)11時に再訪することになった。

約束の日時に行ってみると、同研究所のアルヒーフは貧弱で、ここでは埒の明かないことがすぐにわかった。大多数はペテルブルグ大学そばの科学アカデミー文書館にあるという。しかし、それは落とした釣り針を海岸で探すくらい不毛なことらしい。忙しい中、副所長のゲトマン博士がわざわざ脚を運んでくれた。マクシモーヴィチ研究で日本の植物学者たちと長年交流があるそうで、北大植物園で開かれた展覧会にも招かれて講演したとのことだった。かれは標本にじかに当たれという。標本室担当の研究者は台湾からのお客さんたちの接待中だったが、ゲトマンさんは彼女の携帯に電話して、翌15日の12時に会ってもらえることになった。



その研究者はアリサ・グラボフスカヤさんというが、正式には二重姓で、あとにボロジナがつく。そんな縁で「ボロジノ」には興味津々の様子だった。祖父がボロジンとんいう有名な植物学者で、この研究所の所長も務めた方だそうである。アリサさんも札幌には4ヶ月滞在だけでなく、盛岡や京都にもいったことがあり、日本の各地の植物学者とは常日ごろメールのやりとりをしていると

いう。京大でわたしが指導した院生の竹中梨紗さんも、私の退職後ここで研修していったと
のことで、まったく世間は狭いと思った。

彼女に「ボロジノニシキソウ」の学名と発見者名、属・種・目はと聞かれた。素人の悲しさ、調べてからくるべきだったことに、そのとき初めて気づいた。標本は植物分類の体系にしたがって保管されているのだから、当たり前すぎるほど当たり前だ。アリサさんは日本の仲間聞けば分かるからといって慰めてくれた。一方パールキン某という名前はよく知られていて、マクシモーヴィチと行動を共にした人らしい。かれが採集したものや、マクシモーヴィチの手になる標本を見せていただいた。標本の保管してある部屋は天井が高く、教室を3,4室つないだほどもあった。そこに背の高い木製の戸棚が背中合わせにずらり並んでいる。

ただし古くさくてホコリだらけである。そんなことが一向に気にならなそうなところが、いかにもその道の人らしかった。

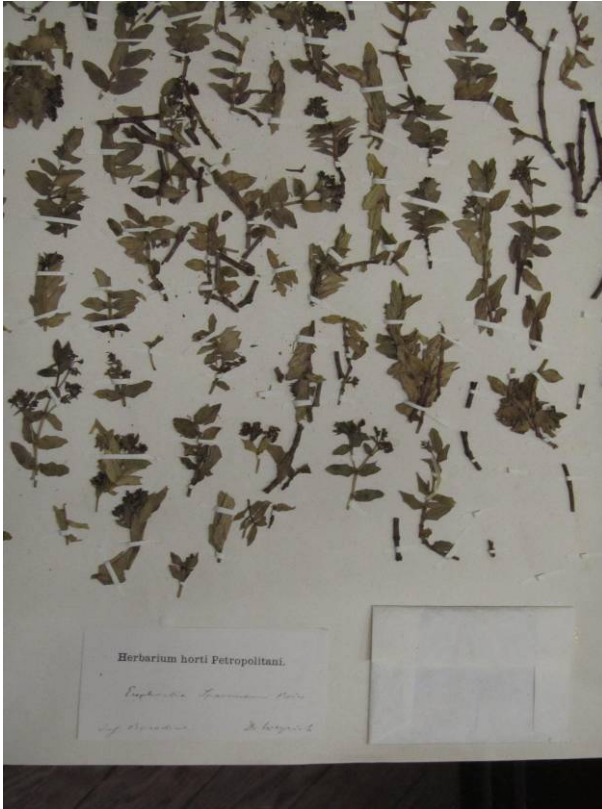
ホテルに帰ってインターネットで調べると学名がかんたんに特定できた。その頃はよりましなホテルに移動していたが、WiFiの利用料金がばかにならないので、属・種・目は日本にいる妻に調べてもらった。それをまとめて、あらためてアリサさんにボロジノ諸島で採集された植物を探し出してくれるようお願いした。モスクワへ移る24日の昼までに間にあえば、写真を撮りに駆けつけるつもりだった。

発見その2

なんの音沙汰のないまま、モスクワでふたたび帝政ロシア外交文書館に通い始めた。2月25日（金）前回請求したのと同じ *Дело* を注文した。同じだからすぐ出してくれるかと思ったら、3月3日（木）になるという。おまけに3月8日は国際婦人デーで休館だ。利用できる日は3日、4日、7日そして帰国する日の9日3時まで。ところがわたしの読みは甘かった。7日に開館時間の9時半にすこし遅れて行ったところ、いくらブザーを押しても鉄の扉を開けてくれない。しょうがないのでホテルへ戻りフロントで聞いてみた。「もしかして今日も休日？」すると怪訝そうな顔つきで「そうですけど？」と戸惑ったような返事が帰って来た。ペテルブルグでも2月23日は「男の日」で一日損しているのに、なんということだ。いっそバレンタインデーに「男女の日」という祝日を制定して一日にまとめてしまったらいいのに、とやたら腹が立った。でも、あと半日あればなんとこ筆写できるかも知れないと思い、あきらめた。

簡単にあきらめが付いたのには訳がある。実はモスクワに移って4日目の3月2日、アリサさんから次のようなメールがとどいていたのだ。

「この種のもは、日本関係の標本も一般標本も見ましたが、Z.ポナフィジンの採集したものは見つけることができませんでした。（かれが上陸はしなかったと、説明したのだが誤解されたようだ — 木村）そのかわり、G.ヴェイリフがボロジノ島で採集したもの（日付なし）（写真参照）を見つけました。ドウダイグサ-*Euphorbia* 属とされているこの植物は現在 *chamaesyce* 属です。この採集についてはブレトシュネイデルにこういう言及があります（Bretschneider, 1898:621）『K.マクシモヴィチ(1883)は、1854年2月はじめにヴォストーク号が訪れたボロジノ島から、ヴェイリフが持ち帰った *Euphorbia sparmannii* Boiss という植物について報告している。この船は1853年12月22日（11月23日の間違いではないか？このときヴォストーク号にはプチャーチン自身も乗船し上海に上陸した — 木村）長崎を出港、1954年1月24日プチャーチン提督は同船を上海に派遣したが、それは琉球本島に、ついでマニラに配達しなくてはならなかった郵便物の件のためだった。ヴォストーク号はポナフィジン船長によってかつて発見された、琉球本島の東方にあるボロジノ諸島の探索のためにも派遣されたものである。（Bretschneider, 1898:575）』。この時の採集の話でしたか？いずれにしても、きちんとした写真を撮ってあなたに届けます。（後略）」



なんという貴重な情報をいただいたものである。1826年にサルイチェフの海図に載ったものの、それから28年ものながい間、ボロジノ諸島は再確認できないままだったのだ。ポナフィチンの発見から数えれば34年もの空白期間があったということになる。南大東村誌によれば、同じ頃那覇にいたアメリカのペリーの僚艦のうち2隻が小笠原諸島探検の帰路、1853年6月22日に南ボロジノ島を確認している。ボロジノ諸島は日露、日米の外交テーマに直接関係はなかったが、時を同じくして露、米の世界史的な動きがこの小さな二つの島で交差したことは偶然ではない。しかし、もしもこの島が「ボロジノ」と命名されていなかったとしたら、はたしてプチャーチンもペリーも、

外交交渉の合間にわざわざ探しにでかけようという気になっただろうか。ポナフィチンの思いは30余年をへてもなお、こうして後世の人々に届いたのである。そしてその思いが通じたからこそ、両者ともこの巨大な珊瑚礁の「山」、(海水を除いたら富士山より高い双子の山が出現するはずである)を領有しようという意志はみじんも持たなかったのではないだろうか。

放浪の予期せぬ結末

3月10日、私は大いなる成果に満足して成田空港に下り立った。翌11日には午後2時からロシア語教育関係の研究会が早稲田大学であり、夕方5時からは国際交流基金が主催する面白そうなシンポがある。東京のホテルを2泊予約しておいたというメールを黒岩から受けとったのはモスクワを発つ直前だった。

当日は黒岩も昼前に上京し、早稲田大学へ連れだって行った。研究会は定刻に始まった。プレハブの建物の一室で新潟県立大学でのすばらしい実践報告を聞いているときだった。突如ものすごい揺れが襲い、書架や床に積まれた本が踊りだした。私たちは急いで体育館前の広場に避難した。体育館の幅一杯に並んだガラスのドアが、一斉に震えるのが不気味だった。旗竿や立木も大きく揺れている。何度も余震がぶり返す。立っていると船酔いのような気分が襲われる。文学部のキャンパスは閉鎖されるというので、私たちは立ったまま次回の予定などをきめて散会した。

四谷3丁目で行われるというもう一つの行事は取りやめになるかも知れないと思った。確かめようにも電話が繋がらない。しょうがなくて神奈川大の小林さんと私たちは連れだって

街角の地図をたよりにひたすら歩いた。四谷付近はたいへんな人だかりであった。ようやく会場を見つけたが、私たちを待っていたのは「中止」の立看板だった。公共交通機関は一部のバスをのぞいてまったく動いていなかった。歩くしかない。そうと決まったからにはじたばたしても始まらない。すぐそばのビルに、地下に通じる階段があった。のぞいて見るとなにか食欲をそそる文言が目にとまった。降りてみた。なかなかしゃれた店である。天井に掛けてあったグラスがいくつか落ちたらしく、店主が後始末をしていた。薄型テレビが床に置いてあった。ちよっぴり腹ごしらえをして、一杯引っかけから歩き出すつもりでいたが、酒や食べ物があまりにうまく、地震の現場を次々に映し出すテレビに見とれ、思わぬ長居をしてしまった。

外へ出てみると、新宿通の広い歩道一杯に人の津波がこちらへ向かってくる。ヘルメットをかぶった女性社員がかなりいた。どの表情にも悲壮感はまるで感じられない。非日常との思わぬ遭遇にうれしさのようなものを感じてさえいるようだった。小林さんは銀座の弁護士事務所に勤めている奥さんとようやく連絡が取れ、落ち合っ一緒に、かなり遠方の自宅まで帰るとのことだった。私たち二人はあっけなく半蔵門にあるホテルに着いた。東京の中心部は歩いてみたいことはないんだと知って、なにか拍子が抜けてしまった。

研究会には富山や新潟からの参加者もいて、それぞれたいへんな思いをして翌日や翌々日に家へたどり着いたらしい。東京在住の人たちも途中の混雑がひどく、帰宅は朝方の3時とか4時になったということだ。盛岡へ帰るルートはすべて壊滅していてどうにもならない。私たちは、暖もとれ、水も食べ物も寝るところも保障されてはいるが、まぎれもない「避難民」となっていた。事態を見守るために、その日から同じホテルで延泊を繰り返した。羽田から秋田行きの飛行機が出るというので、それに乗ることにした。あとはタクシーかレンタカーを使えばなんとかかなる。秋田へ来てみると、ガソリン事情がとんでもないことになっていた。ここでも延泊せざるをえなかった。2日目に秋田新幹線「こまち」号が盛岡まで4往復するというニュースを聞いたときは、半信半疑だった。

満員で乗れなくてはいけないと思い、食料品を買い込んで早めにプラットホームに降りた。乗客は意外にもごくわずかだった。盛岡に着き、駅前から自宅まで7、8分ほどの道を歩いてみるが、震度6弱の地震に襲われたとは思えないほど、町並みは普通の様相をしている。おそるおそるマンションの自宅のドアを開けてみる。何も変わっちゃいない。自分の書斎へ入る。本が1冊転がっていた。黒岩の書斎も見てみる。床に書類や本があったが、はたして地震のせいには分らない。リビングも納戸の大丈夫だった。寝室だって鏡台の位置が多少ずれているほどで、なにもかもそのままだった。作り付けの棚の食器類は、扉がぜんぶ地震時にロックされていたので、これも無事だった。

3月18日だった。わたしの放浪生活はきっかり2ヶ月かかったわけだ。